



梵

2月28日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

2月28日のおはなし「梵」

ボン。ブラフマン。ビッグ・バン。宇宙のはじまりの音が聴こえるか。

それが宇宙飛行士マイク・スペンサー（通称ミック）の最期の言葉である。ミックはルナ・ステーションの船外活動中に、恐らく微小なデブリ（宇宙塵）との接触が原因と見られる移動装置の故障に見舞われ、救出活動も虚しくみなの見守る中、徐々に遠ざかり宇宙空間の闇に吸い込まれていった。

ミックは剽軽な男だった。いつでも軽口を叩いたり、ちょっとしたいたずらを仕掛けたりしてみんなを笑わせていた。遠ざかりながらもミックはのべつまくなしにいろいろとまくしたてていたのだから、こういうのは不謹慎かもしれないが、我々の別れは実になごやかであたたかいものだったと言える。ミックの相手をしていただいたのは主に通信士のベッキーだったが、彼女は日頃からミックと特に仲がよくいつも冗談を言い合い、からかい合っていた。

「オーケー、みんな。そう大騒ぎするな」一切の救助活動が無駄に終わり、ただ見守るだけとなった時にミックはまず言った。「いや、違うか。ミヤケが一人で喋ってるのかな」

ミヤケは学生時代に応援団に所属していたとかでやたら声の大きい日本人だ。

「違うわミック」ベッキーはすかさず切り返した。「いまイチローがランニングホームランを決めたのよ。ごめんねテレビを切るわ」

もちろんテレビもついていなければ、ベースボールの試合なんか知ったことではない。それどころかその時にはもう、コントロールルームは静まり返っていた。ついさっきまで喉をからすほど叫んで、次から次に指示が飛び交っていたのが嘘のようだ。全員が遠ざかりつつあるミックをただ茫然と見守り、喋るべき何も思いつかなかったからだ。誰かが何かを言おうとして、咳き込み、言葉を続けられなかった。胸が詰まって言葉にならないからだ。そういうときも通信士のベッキーは空気をほぐすように落ち着いた口調で話をする。

「ミック、そこから何が見える？ あなた、何かすごい景色を独り占めしてるんじゃないの？」
「ベッキー」ミックがため息をつく。「ぼくはいまちょうどアイスクリーム・パーラーでミントチョコを買うところだったんだぜ。おっといけない。眠ってしまっていたみたいだ。起こしてくれてありがとう！ ええと何だって？ ここから何が見えるか、だって？」

そして、それからしばらくミックの実況中継が続く。ルナ・ステーションにいても見えるようなおなじみの風景が、ミックの手にかかると抱腹絶倒のファンキーなスペクタクルに変わる。

「月面には何がいるんだっけ、ミヤケ。サルだっけ」

「ウサギだ」ミヤケが吠えるような声で答える。「サルじゃない」

「そうだ。ウサギだ。ここからもちゃんと見えるよ。歴代のプレイメイトも勢ぞろいしている。おーっと、うわっ。いきなりアレをはぎ取った。プレイメイトの一人の水着を。けっこう大きなピンク色の。んー。これはぼくの口からは言えないな。あのウサギ、かなりのワルだね」

コントロールルームに笑いは起きないが、その場に居合わせる全員が、目をしばたきながらぎゅっと結んだ口元に懸命に笑みを浮かべようとしている。それが礼儀だからだ。ミックの最後のジョークに対する礼儀というものだからだ。何も喋れない士官たちに代わってベッキーが巧みに相手をする。

「ミック、いけないわ。わたしたちの子どもが起きてしまいそうなの」

「わお！ 気をつけなきゃね。ぼくは教育にはうるさいんだ」ミックはすぐに反応する。「ところで、それって、どの“わたしたち”？」

ミックはサービス精神たっぷりに喋り続けた。喋り続けただけではない。自分の位置がはっきりわかるように、腕や脚を広げたり角度を変えたりして、太陽の反射光が我々に届くように工夫をしていた。そうしなければわかりづらいつらいつまでにお互い遠ざかっていたからだ。そのおかげで我

々は本当に長い時間にわたってミックを見つめ続けることになった。最初肉眼で姿を見ることができたミックは、やがて肉眼では捉えきれなくなり、メインスクリーンに拡大して映しても小さく輝く点に過ぎなくなった。声は、意外なほど届き続けた。

「おっと、大変だ」ミックはかなり遠ざかったところと言った。「おまえたち、大宇宙の闇に呑み込まれそうになっているぞ！」

もちろんそれはジョークだ。ミックから見れば確かにそう見えるかもしれないが、本当に大宇宙の闇に呑み込まれつつあるのは、言うまでもない。ミック本人なのだ。

「大丈夫よ、心配しないでミック」そんな時もベッキーは軽口で返す。「これ、コマーシャルに入るところだから」

訓練の成果でベッキーの声はハキハキとしてとても明るく元気づけられる。けれどもコントロールルームのいる全員が、ベッキーの頬をはらはらと流れ続ける涙に気づかないわけにいかない。

「ええと。そっちはまだ聞こえているのかな？」

その時、ミックがいままでと少し違ったトーンで言った。我々は身を乗り出し耳をすませた。「こっちは無音になった。ベッキーのジョークが聞こえなくてさびしいよ」しばらく間があいた。はあ、はあ、というミックの大きな息づかいがやけにはっきりとコントロールルームに響いた。「これは罰ゲームかい？ ぼくは喋り過ぎたのかな？」

コントロールルームの全員が「ノー」「ミックもっとしゃべってくれ」と口々に言った。

「大事な時にくだらないことばかり言って悪かった。静かだ。とても静かだ。相手がいないとぼくはしゃべれないよ。みんな聞こえてるか？」

コントロールルームの全員が「イエス」「みんな聞いているぞ」と大声で言った。

「聞こえてなくても誰かがこの声を拾うだろう。そいつのためにしゃべろう。ぼくはマイク・スペンサー。月軌道周回基地のルナ・ステーションのクルーだ。船外活動をしていて宇宙空間に放り出された。仲間は全力を尽くして救助に取り組んでくれた。でも運悪くぼくは仲間から遠ざかりつつある」

誰かが嗚咽を漏らし、こらえられなくなった何人かがすすり泣きはじめた。その間もベッキーは小さな声で「ミック？ ミック？」と呼びかけ続けている。再び通信がつながることを期待しているのだ。

「ぼくはいまたったひとりだ」ミックがとても素直な調子で言う。しばらく間があく。大きく深呼吸でもしているような気配がある。「ぼくから見える月もほとんど夜の側だ。縁が光っているけどあれも間もなく見えなくなるだろう。そうなると本当にすごい闇に包まれることになる。声も聞こえない。何かに触ることもできない。本当にぼく」

声が途絶えたので、我々はとうとう通信が途絶えたのだと思って、思わず「ミック！」「ミック！」と叫んだ。けれどもそれは通信の終わりではなかった。

「ぼくは、本当に、孤独だ」ミックの声が泣いていた。コントロールルームでもあちこちで号泣する声が聞こえて来た。「誰もいない。何も聞こえない。見えるのは月と、星だけだ。太陽も隠れてしまった。ぼくを照らす太陽もない。みんなにも、もうぼくは見えていない。おや。あれは何だ」

そしてミックの最後の中継が始まった。

「月面に何かがある。みんな。聞こえるか。聞いてくれ。月の裏側に何かある。地球から見えないところに。足跡だ。巨大な。巨大な足跡だ。踏みしめる音が聞こえる。わかるか、ミヤケ？ ボンだよ。サンスクリットのブラフマン。宇宙の真理がここにある。本当の沈黙の中でしか聞こえない音だ。あの巨人のステップは宇宙の始まりの音だ。みんなこっちに回り込んだら月面の足痕を見逃すな。ボン。ブラフマン。ビッグ・バン。宇宙のはじまりの音が聴こえるか！

それが通信の最後の部分だった。後になって、誰かはそれをミック一流の最後のジョークだとい、誰かは人生の終わりにミックが大きな真理に到達したのだと言った。どちらだとしてもそれはとても偉大なことだとみんなは思った。でもそんな話が出ると決まってベッキーは言った。「だめよ。わたしは納得しないわ。ミックのオチを聞くまではね」

(「月面の足跡」 ordered by shirok-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

梵

<http://p.booklog.jp/book/45171>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45171>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45171>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.